

The Origin  
**Tubbataha Reef**  
UNESCO World Heritage

世界遺産の  
サンゴに出会う

こんな話を聞いたことがある。  
日本などを含む南太平洋の生き物達のオリジン(発生源)は  
フィリピン周辺の海であると。  
ならばスロー海の中中で世界自然遺産として手厚く保護されるトゥバタハリーフは、  
その発生源の核と呼ぶべき場所なのではないのだろうか。  
高鳴る期待に胸を膨らませオリジンに飛び込んだ。

# オリジンの海

Photo & Text : **Kyu Furumi**  
Design : **Chimi&Panari Design**

©WEB-LUE ウェブマガジンの二次配布および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

Web-lue 2008. Winter

 Information Link ← 関連情報HPへ  
<http://www.wtp.co.jp/renewal/tubbataha/index.html>



でっかいサンゴのモニュメント。工芸作品みたいですね



01:あちこちにあるカイメンにはメニーホストゴビーなどがついている  
02:本当に拳ほどもありそうな大きさ。何食ってたらそんなに成長するんでしょうね

# 古見きゆう、 オリジンのの 海へ。



空から何かが降りてきそうな曇り気

この旅はフィリピン西南部のパラワン島の都市プエルトプリンセサから始まった。プエルトプリンセサの港で今回乗船するパラオスポーツ号に乗り込み潜る準備を始める。すぐにもトウバタハまで行きたいところだが、まずは港から程近くのレッドクリフと呼ばれるポイントでチェックダイブ。経験上焦ってもあんまり良いことが無いので、はやる気持ちを抑え、冷静なカメラマンを装いエントリー。内湾のポイントだけに透明度はあまり良くないのだが、水深も浅く流れも無いのでじっくりとマクロ生物と向き合う。「おっ。ハシナガチョウウオ!」「やっ!ヤスジョウウオ」といった感じで

一瞬にしてチェックダイブのポイントに虜になる私。現金な男でスマセン。ここでの名物とされる拳大のジョーフィッシュとも無事に対面しウキウキで撮影を続ける。しかし人間熱中すると時間が過ぎるのが早いもの。ガイドの出す浮上サインに少々寂しさを覚えながらエキジット。「あの、もうちょっと潜りたいんですけど。」その願いは叶わず後ろ髪引かれながら本船に戻った。

日も傾いてきた夕方。港の周りの山々が夕陽に照らされて黄金色に輝いていた。今晩からトウバタハリーフへ移動する。10時間後、目が覚めたらそこは世界遺産の海だ。

# 群れと大物

朝、目が覚めると船はトゥバタハリーフに到着していた。飲んでみたいほど美しい淡いブルーの水面が目には嬉しい。ファーストダイブは全長10mほどの沈船がメインとなるマラヤンレック。沈船の周りにはギンガメアジなどの群れが集まってきている。一本目から景気がいい。基本的なダイビングスタイルはドリフトダイブ、少し泳いだところで緩やかに流れるカレントにのり、ドロップオフを流していく。アオウミガメがメラネシアンアンティアスやパー

ブルビューティーの鮮やかな雲を突き破り気持ち良さそうに泳いでくる。なんとなくここに居る生き物たちは警戒心が薄い気がする。実質トゥバタハリーフを潜ることが出来るのは一年のうち3~4か月ほど。全てのポイントにおいて生き物たちもダイバーを見慣れていないのか、好奇心が旺盛なようでフレンドリーだ。



01:サンゴのなどをふらふらと団体で泳いでいるアヤコショウダイ  
02:自ら近寄ってきたと思ったら、また離れていくバラクーダの群れ。その繰り返し  
03:ギンガメアジの群れもビュンビュン回る

カメとの遭遇率もかなり高い。龍宮城まで連れて行って……

# 流。

世界遺産の  
極上のブルーを漂う。  
いつもの海水も  
どこか特別な感触

## オリジンの海

古見きゅう、世界遺産のサンゴに会う

極上のブルーに包まれながら流れる潮に乗り、リーフエッジを漂う

The Origin Tubbataha Reef UNESCO World Heritage  
Web-lue 2008. Winter

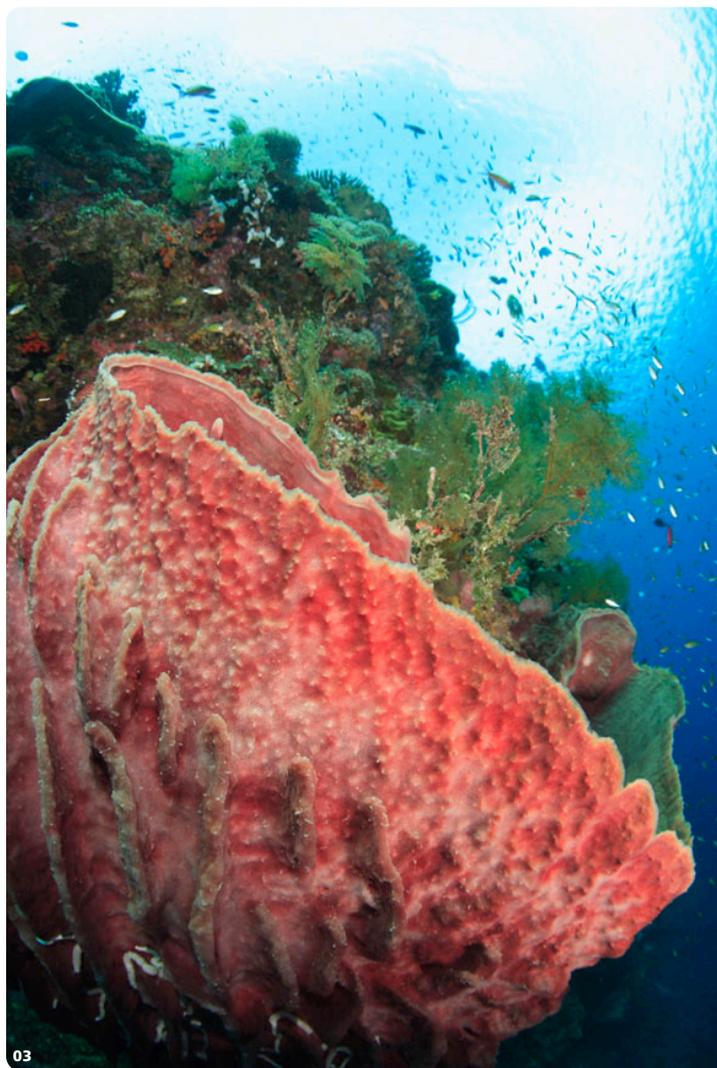
 Information Link <http://www.wtp.co.jp/renewal/tubbataha/index.html> 関連情報HPへ



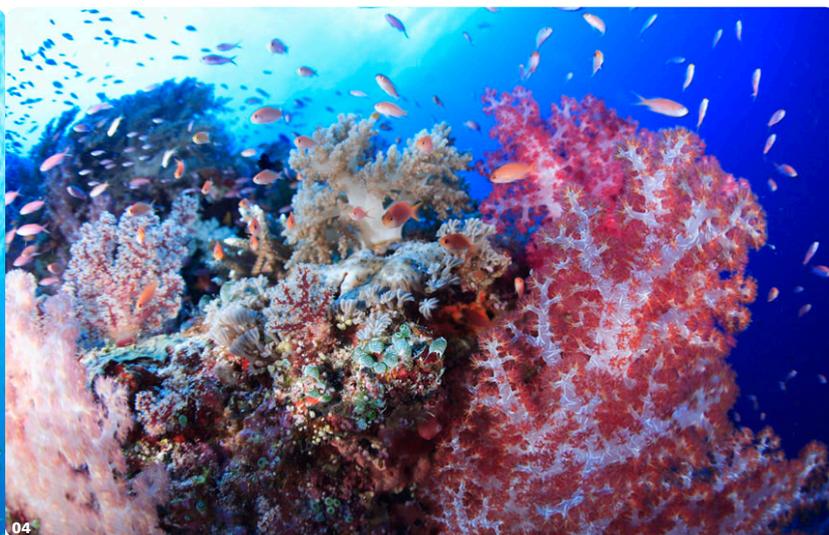
01



02



03



04



05

生命の宝庫、  
世界自然遺産  
トゥバタハリーフの価値

# 生命

ここトゥバタハリーフの正式名称は「トゥバタハ岩礁海中公園」。1993年にフィリピンでは初めてユネスコ世界自然遺産に登録された。100km<sup>2</sup>にわたり広がる巨大なリーフは南北に分かれていて、ここに396種のサンゴが生息する。これは世界中に分布されるサンゴの約半数の種が生息することを意味する。これだけのサンゴがひとつのリーフに生息するという事は驚異的である。違う種

が折り重なるように集まり、一匹の巨大な生き物のように意思を発するサンゴ礁だ。中心部は保護区になっているためダイビングはリーフ周辺のドロップオフに沿ったドリフトになる。これらの切り立つ壁には如何にもアジアっぽい巨大なミズガメカイメンやウミトサカ、イソバナなどのソフトコーラルが乱立している。これらを温床に479種の魚類、79種の海藻、10種の高草、9種の鯨類、カメのなか

ではアオウミガメとタイマイが生息する。トゥバタハリーフではサンゴのみならず、そこで育まれる小さな命ともじっくりと相對してもらいたい。僕はこの生き活きと泳ぎ回る魚達を見ていると、トゥバタハリーフの価値というものをうっすらとだが感じる事ができた。今まではあまり感じたことのない感覚が僕の中に芽生えたことは確かだ。

## オリジンの海

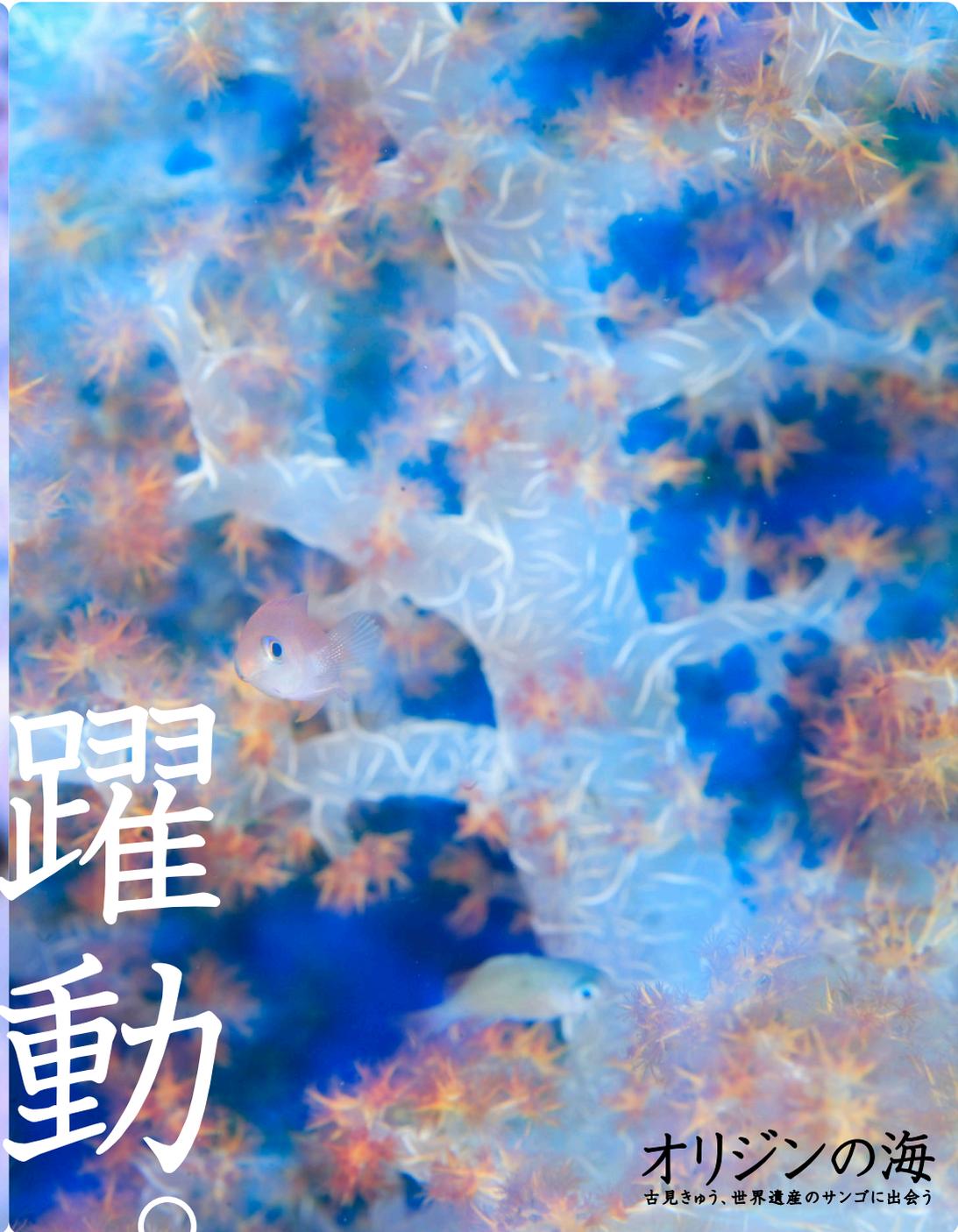
古見きゅう、世界遺産のサンゴに出会う

01:岩やサンゴの上をちよちよ動くタデジマヘビギンポ  
02:クダゴンベもよく見かける。キレイなヤギに乗っているのすごく写真撮る  
03:中に入れそうなほど巨大なミズガメカイメンがいっぱいある  
04:ソフトコーラルとバナダイ説明不要の美しさですね  
05:思考が全てぶっ飛んでいくブルー



縦横無尽に駆け回る魚たち。  
 大きなものから小さなものまで泳ぐ泳ぐ。  
 人間にとっては世界遺産でも  
 彼らにとっては最高の遊び場なんです。

# 躍動



オリジンの海  
 古見きゅう、世界遺産のサンゴに会う

覗き見の達人

美しいソフトコーラルも魚達の宿木になる

The Origin Tubbataha Reef UNESCO World Heritage  
 Web-lue 2008. Winter

Information Link <http://www.wtp.co.jp/renewal/tubbataha/index.html>



# 子豚



01:待ってました!ようやく現れてくれたマンタ  
02:そろそろ宙返りいっちゃうよ  
03:何その尻尾……。漫画の子豚ちゃんじゃない

尻尾が気になる  
子豚マンタとの  
出会い  
さらにジンベエ?

トゥバタハではマンタとの遭遇率もかなり高い。北部のバードアイランド周辺のポイントであるシャークエアポートにはマンタのクリーニングステーションとなっている根が点在し、そこを拠点にマンタを待つ。いつ現れるのか? こればかりは運次第なのだが待っている間にも、ドロップオフ沿いにはバラクーダやカスミアジがブリブリ回ってくるので、気を抜いている暇はない。しかし、この取材中は肝心のマンタがなかなか現れなかったのである。「まあ自然のことだししかたないよ」と思いつつも、ちと焦ってくるのがカメラマン。探しに泳ぎ回りたいところだが腹をくくり、じっと我慢すること30分。向こうからガイドが泳いできた、マンタがいよいよ現れた!

マンタは岩陰でまだ見えない。少しずつ少しずつ影が近寄ってきた。やや小型のまだ若いマンタのようだ。よし! もう少しもう少し。来た来た来た。バシバシバシ! エイヤエイヤとシャッターを切る。ゲストも大興奮! ぐっと近寄ったところで役者なマンタは後宙返りを一発。すると子豚ちゃんのようなぐるぐるんの尻尾がチラリ。「ありゃ、、、?」僕は以後それが気になってしかたがなかったのである。ヤングマンタなりのお洒落なんですかね?

トゥバタハはマンタだけでなく実はジンベエザメの目撃例も少なくない。これはハッキリ言って運でしかないのだが、必ずここにはいるのである。僕もいつかこの海で会ってみたいものだ。

# 光芒。

## オリジンの海

古見さゆう、世界遺産のサンゴに会う

抜群の透明度に  
光のカーテンが  
降り注ぐ。  
これも世界遺産の  
演出なのかな。



安全停止中は水と光を楽しむ

周囲に何も見えないのは光のカーテンが全てを隠してしまっているのかも

The Origin Tubbataha Reef UNESCO World Heritage  
Web-lue 2008. Winter

 Information Link <http://www.wtp.co.jp/renewal/tubbataha/index.html> 関連情報HPへ



01



02



03

無言の珊瑚が  
物語る真実  
忘れてはならない  
大切なこと

そして極めつけはやはりサンゴの群生だろう。南北のリーフでは多少雰囲気は違うのだが、どちらもありとあらゆるサンゴをまとめて敷き詰めたような状態。表現としては美しいかもしれないが、手入れが全くされていない芝生のような感じだ。しかしそれは全く荒らされていない、太古の昔からこの場所で成長し続けたサンゴ達の姿なのだろう。潮通しが良いためか全体的に背の高いサンゴは見当たらないが、様々な色や形を取り込みながらサンゴ群生は果てしなく続く。冒頭にも述べたが、まさにここがオリジンとなり、また揺りかごとになって多くの生き物達を支えているの。その恩恵は海を辿り我々の住む日本にまで届いているのだろう。言葉にすると「美しい無精ヒゲ」というか「雑然とした美」というのか、自然のあるべき一つの姿をこのトゥバタハリーフのサンゴ達が物語っているような気がする。生き物としての強さ。自然界における役目。それら本当に大切なことを物静かなサンゴが声高らかに訴えているように感じる。日本の世界地図で見ればフィリピン周辺はちょうど中心部分にあたる。世界の中心の発生源。トゥバタハリーフは潜る人間に、これまで無かった不思議な感覚を与えてくれる。是非とも僕ももういちど味わってみたい。そんなふう強く思う。

01:このサンゴはオリジンの中のオリジン。地球の無精ヒゲです  
02:カメは世界遺産のサンゴをかじっても罰せられない  
03:健康にモリモリと育つサンゴたち。この美しさが永遠に続くことを願う

## オリジンの海

古見きゅう、世界遺産のサンゴに出会う

The Origin Tubbataha Reef UNESCO World Heritage  
Web-lue 2008. Winter

Information Link <http://www.wtp.co.jp/renewal/tubbataha/index.html>

# オリジンの海

古見きゅう、世界遺産のサンゴに出会う

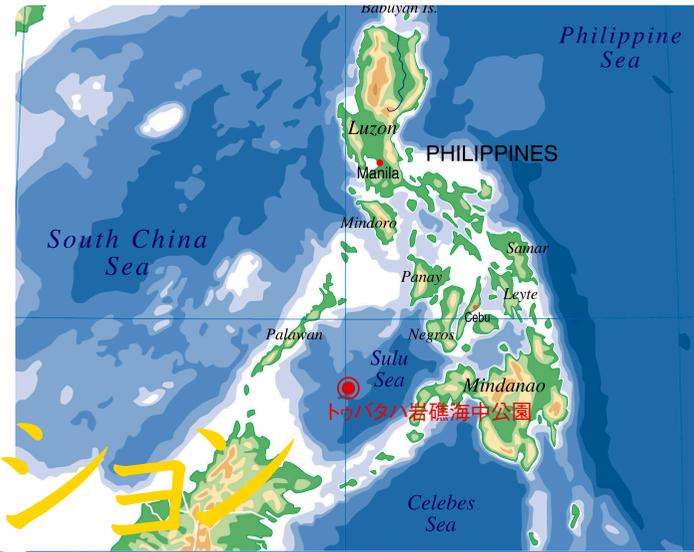
## アクセスは？

フィリピンのマニラ空港を経由してパラワン島のプエルトプリンセサへアクセスする。空港からプエルトプリンセサの港までは車で約20分。各クルーズ船は出航日が決まっているので、それに合わせてプエルトプリンセサに到着する日程を選択することになる。マニラ〜プエルトプリンセサのフライトは翌日になるので、マニラで1泊することになる。パラワン島から150kmの沖合いで港からトゥバタハリーフまで船で約10〜12時間。

## トゥバタハリーフツアーについての予備知識

トゥバタハリーフまでは、各地からマニラを経由（1泊）してパラワン島のプエルトプリンセサへ向かう。プエルトプリンセサの空港到着後、送迎車で港へ移動し本船に乗り込みダイビングに備える。港からトゥバタハリーフまではおよそ150kmほどの移動となる。基本的にリーフでは着底やサンゴに触れ

ることは禁止。時に潮の流れが速くなる場合もあるので、しっかりとガイドの指示に従おう。万が一に備えてシグナルフロートなどの緊急グッズも用意しておくべきだろう。



# ツアー・インフォメーション



ダイビングから船上での生活まで極上のサービスを提供してくれるパラオスポーツ号



ボートでの移動距離  
なんと150キロ。  
だからこそ出会える  
世界遺産の実力

ダイバーだからこそ辿り付けた世界遺産。この美しさを是非堪能したい

The Origin Tubbataha Reef UNESCO World Heritage  
Web-lue 2008. Winter

Information Link <http://www.wtp.co.jp/renewal/tubbataha/index.html>



- 01:ここにたどり着くまでも、ちょっとした旅行気分を味わうことができる
- 02:後ろの船長兼ガイドの説明を受けながら出発
- 03:周辺にはオトカゲやサルも住み着いている
- 04:いよいよ地底川の中へ。ちょっとドキドキ
- 05:大小様々な形をした鍾乳石に息を飲む



## Underground River

# もう一つの世界遺産 パラワン島の地底川



もし時間に余裕があるのならばクルーズを下船した翌日はパラワン島のもう一つの世界自然遺産である地底川ツアーに参加してみたい。プエルトプリンセサから車に乗ること約2時間。港に到着しバンカーボートに乗り込み15分。道の整備された林道を歩くこと約5分で到着。長い道のりのように感じるがプチ旅行気分で行けば道中も楽しめるだろう。さて地底川というどういふものなのか想像がつかず、地底人でも出てきそうなイメージだが、実はこれは鍾乳洞の中を流れる川。なので水に浸かる心配はない。地底人も居ない。1887年にイギリス人により発見され1999年12月に世界遺産として登録された。

小型のボートに乗り込み先頭のゲストが持つライトを頼りに周辺を見渡すかたちになる。内部には巨大な鍾乳石もあり見ごたえは充分だ。旅のオプションとしてもう一つの世界遺産を巡ってみるのも良いかもしれない。

